

---

# テュデナベールの魔女

† アラクネ †

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

テュデナベールの魔女

### 【Nコード】

N3674C

### 【作者名】

十アラクネ十

### 【あらすじ】

目が覚めたら、見知らぬ街の真ん中にいた。奇妙で不気味な住民達に囲まれ、分かっているのはただ一つ。『向かってくるあの娘を、この手で殺さなくてはならない』

## （前書き）

長いので連載にしようか迷いましたが、作者的に一気に読んでほしい作品でしたので、あえて短編にさせて頂きました。

目が覚めると、見知らぬ街の真ん中にいた。

少し、頭がボウツとしている。眉をしかめながら辺りを見回し、奇妙に統一感の無い風景に首を傾げる。

（えー……、と？）

頭を小突いて記憶を辿ろうとする。記憶の断片がふと過ぎった時、突然腕を引かれてハツとした。

「ちよつとお、何ボケてんのよう」

振り返った私の顔に、濃い紫煙が吹きかけられた。艶めいた黒髪をきつちりと結い上げ、けれど派手な着物をだらし無く着崩した女が、とろんとした目で私を見ている。

「もうゲームは始まってんのよう」

（ゲーム……）

再び思案の泥に沈もうとする私の意識を、別の声が制止する。

「ほらほら、すっかりしなつて。敵はもうそこだよ」

言いながら私の手に石を握らせたのは、ピエロの格好をした小さな少年。

「……。敵……？」

小さなピエロがニツと笑い、勿体振った仕草で道の向こうを指し示す。

晴天の空に照らされた、奇妙に歪んだ広い道。その先に、長い薄茶色の髪を揺らしながら歩いて来る、色の白い女の姿が見えた。

切れ長の力強い目に、少しツンとした鼻。淡く色付いた唇をキュッと引き締めたそれは、紛れも無い、この私の顔ではないか。

「うふふふうう」

派手な着物の遊女が、楽しそうに首をのけ反らせる。

近付いて来る、自分と瓜二つな顔を持つ人物。

しかしこれは、怪異などではない。彼女は。

「……クレハ」

私、コノハの双子の妹。

生れつき心臓が弱くて、病院と自宅の往復ばかりだった可哀相な子。

全く同じ外見でありながら、光と影のように異なっていた、私の妹。

「……クレハ……、あんた」

唐突に、凄まじい勢いで黒い感情が噴き上がる。

（殺さねばならない）

歩いて来る自分そっくりな妹を見るうち、視覚からその激情は私を満たす。

（殺さなければ）

ピエロから渡された石をきつく握り、私は半ば反射的に走り出した。

「うあああああー!!」

妹が走り出したのも、ほぼ同時。

私達は思い切りぶつかり合い、アスファルトの上に倒れ込んだ。

お互いの体に爪を立てながらも、体制を立て直したのは、私が先。

「あはははは！ いいよいいよ！ 頑張んなあ！」

甲高い野次の声。いつの間にか、街のあちこちに奇妙な住民達が顔を覗かせている。

私はピエロに貰った石を振り上げ、迷うことなく妹の顔に振り下ろした。

避けようと身をよじったせいで、石は妹の喉を直撃する。妹の苦しげな呻き声が哀れだったが、私はそれを無視して、二度、三度と

石を振るう。

「この、恩知らず！」

鼻を目を口を砕き、血に濡れていく石。無意識に出た言葉の後を、記憶のカケラが追ってくる。

「よくも、あんな、恩を仇で返すような真似！！」

私達は瓜二つの双子の姉妹。

私は心臓の悪い妹のことを、精一杯気遣って生活してきた。外見が同じだからこそ、せめて姉との差を感じさせぬように。夏でも日焼けを避け、服やアクセサリーは必ず同じ物を二つ買い、入院中の妹に出来る限り付き添い、まるで自分も病に侵されているかのような、そんな日々。

全ては妹を労おうとする気持ちから。

結婚の決まった恋人との時間さえ、クレハの為に割いた。

二人きりの甘い時間を、クレハを含む三人の時間に変えた。クレハが楽しそうに笑うのが嬉しかった。彼を挟んで、三人で楽しい時間を共有出来ることに喜びを感じた……。

「なのに、なのにテメエ、その私の気持ちおお！」

クレハの心臓移植の為に、家族で渡ったアメリカ。

どうしてもと着いて来た恋人を、最初は純粋な感謝の気持ちで見ている。

気付きもしなかった。

もっと早く、気付くべきだった。

コノハ、申し訳ない。

深々と頭を下げる彼。

泣きそうな顔の妹。

《僕は君より、クレハを愛してしまった。二人で、一緒になると誓った》

「ふざけんなああ!!」

グシャリ。

渾身の一撃。嫌な音を立ててクレハの顔がひしゃげ、体から力が抜けてダラリと零れる。

「は……、はあ……」

ワツと、歓喜の声が弾け飛んだ。

殺シタ、ヤツタ、と、奇妙な形の住民達が騒いでいる。

「はあ……ああ……」

私は血塗れの石をゴトリと落とし、その場にへたり込んだ。  
しかし。

「ちよつとお、休む間なんか無いわよお」

遊女の青白い手が、意外な強さで私の髪を掴む。

「まあああだ、五分の一でしょうがああ？」

何だっというのよ……

言葉の意味が分からず呆然とする私に、ピエロがまた新しい武器を手渡してきた。

今度は、ナイフ。鋭い刃先が、陽の光にキラリと冷たい閃光を放つ。

「さあああああ、次だよお、次、次、次いいい!!」

ゲラゲラと笑う遊女に、髪を掴まれたままぐいと引き上げられる。  
無理に立ち上がらせられ、私は痛みに悲鳴を上げる。

「何よもう、殺ったじゃん!! 次って何よお!!」

叫んだ瞬間、道の向こうの人影に気付いた。

さつきと同じ。ゆつくりと歩いて来る、何よりも見慣れた姿形、知り尽くした相手の人影。

『何だ、この娘、なぜ魔女との契約を覚えていない？』

2メートルはあるかという巨大な蜂が、ワンワンと奇妙な音を響かせながら遊女に聞いた。

「んふうう？ 人間にはよくある事さねえ。魔女の毒気に当たって、記憶の一部が欠けちまってんのさああ」

遊女がニタニタと答えると、巨大な蜂がけたたましく笑い出した。『弱い弱い弱い、人間は何て弱い！！』

それが癪に触って、私は遊女に髪を掴まれたまま、蜂に思い切りナイフを奮った。腹を裂いたつもりのナイフは空を切り、巨大蜂は何億もの小さな蜂にバラけて宙に散る。

「さああ、その調子で！ 行きなよ殺しなああ！」

ドンと背中を押され、よろめいた先には、無表情に立ち尽くす妹。「クレ……！？」

いきなり、首を掴まれた。すごい力だ。ヒュ、と喉が鳴り、一気に呼吸が遮断される。

「……つくう……」

私はナイフを振り上げた。首を締める青白い腕を、力一杯切り付ける。

血が迸る。

妹の顔が歪み、一瞬怯んで離れた隙を見逃さない。

（殺さねばならない）

沸き上がる強い確信に押され、私は迷うことなくナイフを翳す。

（大切な者を失わない為に）

ザクリ、と、妹の胸に沈み込むナイフの刃。目を見開き絶叫する

彼女を無視してナイフを抜くと、噴水のように血が飛び散った。

ゲラゲラと笑う声。

もっともっとと煽る、興奮した野次の声。

私は仰向けに倒れた妹にのしかかり、首にナイフの刃を当てると、体重をかけて押し込んだ。

くぐもった悲鳴。

硬い感触。

充血した目玉がグルンと裏返ったと同時に、妹の首は胴体から離れた。

「あ」

「あは、あは、あああは、あ」

血。叫び。血！

私は自棄になって笑う。

そうなるしかない。

こんな残酷な、こんな生々しい……

「あああ、いいね、いいねええ！ 魔女様もお喜びさねえ！！」

（魔女……）

靄がかかったままの頭の中で、ゆるゆると記憶が震える。

妹が入院した、心臓移植専門の、特別な病院。

広い土地を利用する為、アメリカの片田舎にそれは建てられていた。

病院施設の範囲を越えれば、そこはもう、田舎特有の自然の領域。夏でも妙にひんやりとした空気。誰にも荒らされることなく悠々

と茂る木々、微かな葉擦れの音を響かせる鬱蒼とした森は、昼でも尚ほの暗くて不思議に私の興味を引いた。

その森の中で、私は見付けたものではなかったか。

ひどく蒼々と澄んで、ピンと張り詰めるような静寂に包まれた……

「テュデナベールの湖」

我知らずに、唇が囁いていた。

美しく妖しい雰囲気に魅入られ、その湖に近付こうとした時。

そのほとりにポツンと建っていたログハウスの扉が開き、ロープで顔を隠した小柄な女が、静かだが、強く厳しい口調で私を止めた。

《面白半分の興味なら、そこに行くのは止めなさい。そこはテュデナベールという名の異世界に繋がる場所。人間にとって毒にしかなり得ない所なのだから》

「異世界……」

ここが、そうなのだろうか？

私はあの湖に浸って、この不可思議な場所に辿り着いたのだろうか？

「……う……」

ズキリと頭が痛む。一瞬走った、紫色の羽の乱舞、その蠱惑的な映像。

そんな物は、すぐに右手に触れた感触によって弾かれる。

冷たい感触。これは……。

「ガラス瓶……？」

私はピエロに渡された瓶を掴み、左手でこめかみを押さえながら頭を上げた。陽炎のように。

ゆらゆらと、こちらに向かって来る、人影。

私は瓶の蓋を乱暴に振り取る。中身が何かは、大体予想がついている。

「しつこいんだよおおお？！クレハああ！！」

バシヤリと音を立てて飛び散る液体。

それを浴びた瞬間に上がる、獣のような絶叫。

硫酸が、妹の顔を喉を胸を焼く。嫌な臭いだ。もちろんそれくらいでは致命傷にはならず、妹は不様にのたうち回って絶叫し続ける。  
「うるさいなあああ」

私は道に転がる妹の傍らに立ち、力任せに顔を踏み付けた。二度、三度。絶叫は増すばかり。

（殺さねばならない。大切な未来を守る為に）

「早く死ねっつーんだよおおおお！！」

細い踵のヒールで、何度も何度も妹を踏み潰す。焼け爛れた皮膚が剥げ、悲鳴は醜い濁音に変わり、濁って軋む。

殺せころせころせ殺せコロセコロセ殺せ殺せ

野次の声がうるさい。血の臭いが鼻につく。息が苦しい。

「……っグぎっ……え」

生々しい断末魔にハッとして足を止めると、顔をズタズタに碎かれた妹が、今まさに絶命する瞬間だった。

「……は、はは……」

無理に笑おうとした私は胃を引き攣らせ、体を折って地面に嘔吐

した。

もともと胃の中はほとんど空で、吐く物など何もないのに、嘔吐の発作はいつまでも続いた。

息を詰まらせて涙を流し、ようやく一心地ついた時。

「ダイジョウブ？ コノハ」

ぎこちない動きで私の顔を覗き込んだのは、綺麗な銀色の髪をなびかせたビスクドール。

「……？」

その人形には見覚えがあった。

幼い頃、両親が娘達の卒園祝いに与えてくれた、高価で美しいフランス人形。名前は、そう、フランチェスカだ。

キラキラと輝く人形は、まるで幸福だった頃の家族の象徴。全てが壊れる前の美しく愛おしい、儚く脆い夢のカケラ。

「フラン……」

私はすぐるように人形に手を伸ばした。

伸ばした瞬間、バン、と破裂するような音が耳を弾いた。

思わず身を引いた直後、目の前に転がるのは、無惨に砕かれ散らされた、フランチェスカの哀れな残骸。

目を見開く私の前に、わざとらしい仕草でピエロがピストルを差し出してくる。

「……っ！」

たった今人形を粉碎した銃身は、まだ熱を失っていないくて、温かい。

「う……う」

ギリツと歯を噛み締めて、私は真っ直ぐに前を見据える。当然のように、しっかりとした足取りで歩いて来る人影。

見慣れた姿。妹の、私と全く同じ姿。

「クレハああ……」

私は妹に向けて真っ直ぐにピストルを構え、グツと引き金を引いた。想像以上の音と衝撃に打たれ、狙った先が大きくズレる。

私はキーンと響き続ける耳鳴りに目を細め、その場で体制を整えると、無傷でこちらに向かってくる妹に銃口を向け直した。

足をつ張り、引き金を絞る。

二発目を放つ瞬間、頭の中に、消えていた記憶の一部が突然フラッシュバックした。

白い、病室。

頑なに窓の向こうを見つめ続ける、ベッドに横たわった妹。

冷たい視線で彼女を見下ろしている私が唇の端を歪ませ、低く、囁く。

“バチが当たったのよ”

そうだ。

妹の適合者として選ばれたドナーに問題が発生して、心臓移植は直前で中止となったのだった。

手の届く範囲にあった希望を突然取り上げられ、妹は氣力を失っていた。

その妹に、私は怒りと侮蔑に満ちた薄ら笑いを浮かべて……。

妹は長い沈黙の後、ひどく怠そうに体を起こして、私を見詰めた。

『コノに、私がどれだけ悪いことしたか、分かってるよ。許してくれなんて口が裂けても言えない。……でもね』

目を潤ませて、直後、妹は決して言っではいけない言葉を私に投げた。

『本当に彼が好きなの、初めての恋なの。元気になって、彼と結婚して、彼の子供を……』

彼の子供を。

言った妹も慌てて口を手で覆ったが、私の手が動く方が先だった。バシンと、力一杯に頬を打つ音。

“ あんた、私が子供も産めない役立たずだっ て言いたいわけ！！ ”

私は二十歳の時、病気で子宮を摘出されている。

子供を産めない体。彼から結婚を仄めかされた時、どれだけそのことで悩んだことか。それを知った上で家庭を築くことを望んでくれた彼を、どれだけ大切に思っていたことか！

ベッドに倒れ込み、弱々しくすすり泣く妹を置いて、私は病院を飛び出した。泣きながら、怒りと絶望に震え、足をもつれさせながら向かった先こそが、テュデナベールの湖。

慣れないピストルを構えながら、私は記憶の再生に朦朧としながらも、何とか引き金を引くことに成功した。

衝撃。火薬の臭い。熱。

弾は妹の左肩を擦り、パツと鮮やかな血飛沫を上げさせた。

その様子が、また私の記憶を刺激して煽る。

まだ夕方だというのに、木々に光を遮断されて闇に沈んだ、冷たい湖。

その淵で膝を折って座る、私の姿。

水の上に立って私を見下ろす、奇妙な格好のあの女……。透けた衣装を纏い、残忍な笑みを浮かべた、紫色の羽を右肩だけに生やした、あのだ……

「 魔女…… 」

異世界、テュデナベールに巣くう魔女。

ああ。

そうだ。

私は魔女と契約したのではなかったか。

愛する者を、その者と続く未来を守る為に。

魔女は、殺せ、と笑った。

《殺せ》

《残忍な殺戮ショーを、ここの住民達の前で演じてみせよ》

《四回、いや、五回》

《五回殺せ。五人見事に鬨り殺せたら、お前の願いは現実のもの》

五回。

五回殺せば、願いは叶う。

それが魔女との契約。だから向かって来る妹は、常に丸腰なのだ。裏切り者のクレハは、私に殺され、テュデナールの住民達を楽しませる為だけに、何度も甦りを繰り返す。

「ひ……いいははははは!!」

私は狂い切った笑い声を上げ、一気に走って妹との間合いを詰めた。怯んだ妹に投げた冷たい一瞥、至近距離から迷うことなくピストルを弾く。

銃声に掻き消される、か細い悲鳴。

飛び散る血、血に塗れた細かな肉片。

「あはははははは!」

ただの肉の塊になり果てた妹を笑い、その死体を踏み付けて進む。あと一人!

(殺す。殺さねばならない)

ゆつくりと前方に現れる、妹の影。

意気込んで走り寄った私は、けれどその姿を見て拍子抜けしてしまった。

「さああ、これで最後だよお」

遊女が半分はだけたままキセルを吹かし、ケラケラと笑い声を上げた。

「……は、こんなお膳立て、いらないつつの」

異形の住民達が遠巻きに見守る中、私は冷たく微笑みながら妹に近付いた。

妹、クレハは鉄の十字架に戒められていた。

両手を大きく左右に広げ、両足を一くくりにした形で、無防備に私の前に晒されたその顔に、血の気は無い。

「怖いのか？」

ピエロに“道具”を受け取りながら、私は妹の耳元に囁く。

「……でもね、駄目よ。あんたは死ぬの」

ピエロから受けた最後の道具は、なぜか医療用メスだった。

「これで、最後ね？」

サクリと。

あまりにも簡単に肉に沈む、メスの鋭い先端。

恐怖に硬直していた妹の顔が一気に歪み、絶叫が辺り一面に響き渡る。

私は目を見開いてメスを動かし、熱い鮮血を顔に浴びた。 けれ

どもはや、それすらも気にならない。

「けは、あ、あ」

口をパクつかせ、確実に弱まっていく妹の声。強くなっていく全身の痙攣。生々しい死の現実。

「い、ああああ、ああ」

涙を流し、ガクガクと震えながら、妹は私を凝視した。

「あ、あああ……」

顔を血に染めた私と、ふいに目が合う。

「わた、私、は……」

真っ直ぐに見詰めてくる充血した目を凝視したまま、私の手は目当ての物に辿り着く。ドクドクと動いている熱い感触、今なお弾けそうな力強さ。

「私は」

(……?)

ふいに、違和感を感じた。

違和感の理由はすぐに分かった。クレハはいつも自分のことを、クレ、と略した名前で呼んでいたからだ。

私、などではなく。

その意味を理解しきる前に、私は目当ての物を思い切り、生きた肉体から引きずり出した。

耳を覆いたくなるような、断末魔の悲鳴。

その声が消え行く刹那、私は聞いた。

片手に生きた心臓を掴んだまま、確かにそれを聞いた。

『私、は、コノハよ!!』

パキンと。

それはまるで、薄い氷が一瞬で砕け散るが如く。

私の中の、霞みが散った。

ハッと見開いた私の目の奥にあった、明快に晴れた記憶。

魔女と交わした、契約の中身。

あの森の中で私は、千々に乱れた心で片羽の魔女に出会った。

魔女は私の顔を見て、可哀相に、と囁いた唇を残忍な笑みの形に歪めた。凍り付くような瞳で笑う魔女に平伏し、私は絶望するまに妹の死を口走った。

それはもはや、願ひとも呼べない、醜い慟哭でしかなく。

とても愉快そうにそれを眺めていた魔女は、唐突に青白く長い指を私の額に突き刺した。

『そこまで憎む相手とはいかなる者か』

問いながら、私の頭の中身をグチャグチャと掻き回す。

痛みは無い。血が流れたわけでもない。ただ記憶が進しまった。妹と過ごした過去の記憶が、鮮明に、恐ろしいほど鮮やかに、魔女の指先に絡んで弾けた。

その感触のおぞましが逆に私を冷静にさせたのは、果たして魔女の思惑だったのかどうか？

全身を嫌悪と拒絶に震わせながらも、私は燃え盛っていた怒りの炎が、急速に萎むのを感じていた。

炎の向こうに燦っていたものを見たくなくて、私は哀願するように魔女を見上げる。

『どうしたね？』

ねつとりと問い掛けながらも、魔女の指は私の深い部分をなぞるのを止めない。

私は嫌々をする子供のように身を震わせた。

怒りの重みで押し隠していた底の底の本音。

そんなものは見たくなかった。

私は必死で振り払おうと抗いたが、一度浮かび上がった感情を留めることは出来なくて。

認めざるを得なかった。

裏切られて尚も、何ら変わらず彼らを愛しているということ。

妹を。

彼を。

そう、自分自身のことよりもずっと強く、あの二人を深く深く愛しているのだ。

けれどそれをそれを認めろというのは、あまりに残酷な仕打ちではないか。

愛しい者達は共に求め合い、その中に私の存在は無いと言つのに。

『どうしたと聞いたのだが』

歯を剥き出して笑い、魔女は私の脳に爪を立てる。

ガリユ、と鳥肌が立つような音に震えたものの、やはり弾けたのは痛みではなかった。

「嫌だ」

私は痛みの代わりに現れたそれに怯え、幼い子供のように必死で首を振った。

「嫌だあ!!」

叫んで耳を覆っても無駄。

魔女が気の毒そうに笑う。

『自らの内なる声は、そんなにも痛いのか』

そう、私を内側から突き刺しているのは、私自身の内なる声。本当の気持ち。本当は分かっている、見たくなかった現実！

彼の愛を失い、子を作る能力の無い私と。  
彼の愛を受け、子を作る能力を持っている妹。

そう。

生き残るべくは？

これが片羽の奇異な女のやり口だというなら、本当にさすがとしか言いようがない。

さすがは魔女と呼ばれ、恐れられる存在。本当の残酷がどういう物なのか、髓まで知り尽くした者の容赦無い仕打ち。

全くもって、恐れ入る。

「……お願い……」

魔女の膝元にガツクリと頭を垂れ。

私は消え入るような泣き声で、その願いを口にする。

「クレハを、助けて」

その言葉に無表情に応じた魔女の、奥底から滲んで見えた含み笑い。

『いいだろう、娘よ』

ツイと私の胸元を指差し。

『お前のその心臓を、妹に差し出してみせると言っのなら』

一つの命を守る為に、別の命を。

それはごく当然な、等価交換。

死を覚悟して頷いた私に、魔女は冷酷そのものの高笑いを浴びせ掛けた。

『けれども心臓を移し替えるだけでは、我々には何の楽しみも無い

ねえ？』

魔女の目の奥に見た、キラキラと生々しい興奮。

『望み叶えたくば、自身の手で、その命を散らしてみせよ』

『ただ楽に死の時を受け入れるなんて、あんまりに楽すぎるだろうよ？』

だから。

『自らを五回殺せ』

手に掴んだ心臓が、ドクンと跳ねる。

「……あ」

理解が頭に浸透したと同時に、私はビクンと体を硬くした。  
全て、私だ。

惨殺されたのは、全て、私だ。

私がボロボロにして絶命させた相手は、全て、この。

私、自身なのだ。

「ヒッ………！」

理解した瞬間、殺された分身が受けた苦痛が、一気に自分自身に跳ね返ってなだれ込んだ。

「ひいつ……ギ！」

砕かれ、溶かされ、切られ、えぐられ。

想像を遥かに超えた苦痛の波が、私の絶叫さえもを覆い隠した。

!!!!!!!!

醜い苦痛に痙攣しながら、私は濃密な悪意の触手に成す術もなく  
絡め取られて行くのを、辛うじて感じていた。

後には、ただ。

暗転した現実が広がるのみ。

七月二十一日、午前九時五分。

「……脳死を、確認しました」

医師が困惑気味に呟いた瞬間、近くに控えていた中年女性が、弾  
かれたように椅子を倒した。

「コノハ！ コノハああ！」

ベッドに横たえられた娘の体に縋り付き、中年女性は脇目も振ら  
ずに号泣する。

「どうして……何でなの！？ 何でなのよ、コノハああ！」

取り乱す婦人の傍らで、ベテラン揃いの医師や看護婦達も皆、た

だ黙って困り果てるしかない。

急死した青木コノハの死因について、納得のいく説明が出来る者は誰一人いなかった。

「……と、とにかく」

沈黙を破ったのは、初老の病院長。

「すぐに移植手術を開始します。皆、予定通りに」

一斉にざわめく病室。バタバタと、弾かれたように医師や看護婦達が散っていく。

病室には、ベッドに横たわる動かぬ女性と、彼女の母親、その主治医だけが残された。

「コノハ……コノハ……」 ボロボロと涙を流し続ける中年女性を気遣い、主治医の青年が遠慮がちに声をかける。

「……あの、コノハさんはきつと、命をかけて妹さんを守ったのだと思います」 主治医にとって、それは半分本音でもあった。

一週間前の、穏やかなよく晴れた真昼の午後。

青木コノハは、病院の中庭にあるベンチで、ぐったりと意識の無い状態で発見された。

外傷は無く、何らかの毒物を服用した形跡も無かった。

なのに、閉じた彼女の瞳が再び開くことはなく、その肉体はゆっくりと死の道を辿って行った。

四肢が強張り、内臓が死に行き、生きる為に必須な肉体機能が次々と停止し。

最後に、心臓だけを残す形で……

“ 心臓を妹に ”

間違いなく青木コノハ自身の筆跡で書かれた、短いたった一言の

メモ。

いくら一卵性の双子とは言っても、コノハの心臓がクレハにピタリと　それこそ、もともとクレハ自身の物であったかのように適合したのも、医師達を驚かせた。

全てが、不可思議な闇の中で起こった夢のようだ。

ガラガラとストレッチャーが運ばれてくる音を遠く聞いて、医師は宥めながら母親を立ち上がらせた。

肩を支えてやりながら病室から出る刹那、医師は何の気無しにコノハの横たわるベッドを振り返った。

ふいに昔、祖母から語り聞かされたお伽話を思い出す。

不可思議で理不尽で、常に退屈している住民達が巣くう、狂った街の狂った逸話。暇を紛らす為になれば、喜んで生きた人間さえもを引きずり込む、恐ろしい異界への入口……

くすくすくす。

瞬間、何か得体の知れない異質な笑いを聞いたような気がして、医師は全身を総毛立たせた。

慌てて廊下に視線を移し、ボタンと音を立てて病室の扉を閉じる。

二人の去った病室には、物言わぬコノハの亡き殻だけが残された。

くすくすくす。

風に溶け大気に混じり、異質な存在達が含ま笑い。

くすくす……

それはやがて、コノハの遺体を運びに来た病院スタッフ達の喧騒に飲まれ。

気配すらも残さずに。

ひっそりと、消えた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3674c/>

---

テュデナベールの魔女

2010年10月17日03時14分発行